

薪ストーブを囲み、
世代を超えて育む、
心豊かな暮らし

和英対訳の絵本 おじいちゃんの まきストーブ 出版決定!



沢森さんが愛用する薪ストーブ(ヨツール F 600)を囲んで、本杉琉さん(左)と沢森りささん。山梨県北杜市のご自宅にて。

本誌No.17～28で連載した
ストーブウォーミング・メルヘンが絵本として、
長野県小布施町の出版社文屋(ぶんや)から
出版されることになりました。
これを記念して絵の本杉琉さんと
文の沢森りさ(本名 細川たかみ)さん、
細川英雄さんに、沢森さん
ご自宅で語り合っていました。
対話の場所は八ヶ岳のふもとの森の中です。
聞き手は絵本の出版元の「文屋」さんです。
Photo 佐々木恵衣子

文屋: まず、この絵本の前に雑誌「薪
ストーブライフ」の連載があったと聞
きました。その連載のことを教えてい
ただけますか。

りさ: はい、2013年3月から2016年
1月まで12回連載させていただきました。
最初はエッセイで、おじいちゃん
の薪ストーブという本を作りたいとい
うはっきりしたイメージはなかったん
です。それが本杉さんと一緒に書か
せていただいて、だんだんイメージが
ふくらんできて、これは絵本にしたい
と思うようになりました。

文屋: 本杉さんにとって、この一連の
お話はどうだったんですか。

琉: この話に出てくるイメージは、全部、
細川さんの家なんです。森の家のイメ
ージ、だから、おじいさんはご主人の細
川英雄さんでもあるし、小さい男の子
は、お孫さんでもある。だから、この
話は、すべて、この森の家で生まれた

話なんです。

文屋: では、本杉さんとりささんご夫
妻の出会いについてお話しいただけま
すか。

りさ: 本杉さんとは、共通の友人の家
ではじめて会いました。2006年ごろの
ことだったと思います。近くのカフェ
で、本杉さんがつくったダンボールの
人形と鉄の取っ手がとても印象的だっ
たんです。そのあと、現在、シュマン・
デュ・ボヌール(北杜市長坂町白井沢)
と呼んでいる家の庭にぶどう棚をつ
くってもらったのが具体的なおつきあ
いの始まりです。

文屋: ぶどう棚？

りさ: 本杉さんは、何でもつくっちゃ
うんです。

琉: はい、このぶどう棚づくりはおも
しろかった。材料は全部ご主人のひで
おさんが作ってくれたんです、こんな
こと、普通しないですよ。

文屋: それで、この連載がいよいよ絵
本になるわけですが、絵本『おじい
ちゃんのみきストーブ』への思いはど
うでしょうか。

りさ: そうですね、「薪ストーブライフ」
は大人の限られた人の雑誌なので、もっ
と幅広く、いろんな世代に人に読んで
もらいたいんです。

琉: この物語を読むと、出会いの不思議
さと尊さを感じますね。自分の人生
での大事なものは出会い、ほくもこの
ことをずっと大切に感じてきました。
それを子どもから大人まで、みんなが
感じてくれたらとてもうれしいです。

りさ: 絵本ですから、子どもたちに伝
えたいという思いはあります。森の中
の暮らしと薪ストーブ、元絵描きのお
じいちゃんと「つながり家族」、おじい
ちゃんは死んじゃうけど、亡くなって
終わりじゃない。今もずっと生きてい
る、そんな感じですよ。

琉：さっきも言ったけど、これは作り話じゃない。ここのご飯を食べる身内感覚、そして、何でもない普通のこと
が大切というつきあい、薪ストーブの良さは暖かいけど熱くはない。絵としては、こんな当たり前のことは本当は描きにくい。でも、日常の暖かい空間、つながり家族、血縁じゃない人たちが一緒に暮らしはじめる、なんか当たり前だけど、どこにでもあってどこにもない不思議な話ですよ。

文屋：つながり家族って何でしょうか。

ひでお：最近、こちらで「大好きな北杜で最期まで」というシンポがあって、そこで、上野千鶴子さんが「選択縁」ということを言っていましたね。

文屋：選択縁、すてきなことばですね。この絵本のテーマの一つでもありますね。最後にもう一度、この絵本と森の暮らしへの思いを。

りさ：この絵本で、誕生から死までのあらゆる段階、ステージを描きたいという思いがあります。人間の生活のサイクルを描いたら、読む人それぞれの

年齢や状況に応じて受け取り方が異なるし、登場人物の見え方も世代によって変わってくる。そんな絵本にしたい。

琉：薪ストーブの物語はずっとこの森の家の物語。森の暮らし、薪ストーブの暮らしというのは、自分で作っていき暮らしなんですね。楽しみながら生活するという。無理はダメです。薪ストーブは生き物なので、小さい火から大きくなるのをずっと見てると落ち着いてくる。これは精神的に満たされていないと味わえない楽しみです。山の水がおいしいように、都会では満たされないものがここにはあります。本当に価値のあるものはお金では買えません。そんな当たり前のことをこの絵本は語っている。

文屋：薪ストーブの文化は、北米やヨーロッパが本場です。そこで、薪ストーブのある美しい暮らしを描いた絵本として、海外で翻訳出版することを目標に、英訳を付けることになりました。英語学習や在留外国人の子育てにもお役立ていただけます。



薪ストーブの前でおじいちゃんやまどの場面。



家族せいぞろいの場面。



「おじいちゃんのまきストーブ」ラフスケッチ。

和英対訳の絵本『おじいちゃんのまきストーブ』

みんなでつくって贈るクラウドファンディングに参加しませんか？

みんなでつくる絵本です。薪ストーブのある暮らし、森に生きる日々、世代と血縁を超えた家族のありよう……、人生の豊かさ、美しさを礼賛する物語です。この絵本の制作と普及に参加して下さる読者のみなさんを、クラウドファンディング(インターネットによる資金の公募)で募っています。

目標金額は50万円で、参加費(出資額)は5千円から10万円です。ご参加のお礼として、サイン本のほか、すべての絵本にはさみ込む小冊子に「ご協力のみなさま」と題して、お名前を掲載させていただきます。返礼品の一部は、被災地の児童養護施設のに暮らす子どもたちにプレゼントいたします。

クラウドファンディング幹事会社は、株式会社 CAMPFIRE (キャンプファイヤー社)。くわしいご応募方法は、文屋の公式サイト：<http://www.e-denen.net/> からどうぞ！



表紙の原画イメージ。

おじいちゃんのまきストーブ CAMPFIRE 検索

ひでお：2013年3月に本杉さんのパリ・モンパルナスの個展があって、そこでも、琉さんの作品の魅力が話題になりました。国際的というよりも常識にとられない超国籍性ともいえるべきかな。芸術家の自由な生活感覚、でも人柄はとても良識的で、いい加減な芸術無頼ではない、子どもも2人いるとても幸せな芸術家、これが本杉琉さんのイメージですね。

文屋：この絵本は、琉さんというすてきな芸術家に、薪ストーブの炎のような光を当てることにもなりますね。読者のみなさん、クラウドファンディングを通じて、この絵本を世に出す制作プロジェクトにご一緒しませんか。きょうは、ありがとうございました👏